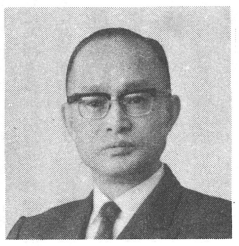
青山同窓会会報

発行所
青山同窓会
新潟市関屋下川原町二
新潟高校内
発行人　斉藤希弌
印刷所　オリオン印刷

就任挨拶

学校長　渡辺芳雄



霞たなびく青山――昭和二年三月（三十四回）校門を後にして三十九年、――その青山へ帰って参りました。卒業してからの学生時代、若き日、中年の日の永い年月学校勤務時代も、一瞬にして過ぎ去ったものです。東京、新潟県、秋田県、山口県と経めぐって新潟県へ帰り十年余、我むしゃらに過して来ましたが、自分の生涯の仕事である高校教育の最後に、母校の校長として赴任しょうとは、思いもかけぬ幸せであると同時に、責任の重大さを痛感しています。

昔を今になす由もないとかいいますが、且っての校歌、応援歌を聞いていると、校舎は鉄筋コンクリートになり、裏の砂山に人家が立ち並んでいても、昔が今に直結し、先生方も昔のままの先生方のような気がして変な気持になります。一方他山の石でもない自分の様な者が此の席を汚してよいものかなど、フッとかすめるのですが今までの長い経験をこゝに注ぎ込むのだと僅かに慰めて勇気を振い立たせています。

同窓諸兄姉の御鞭達と御協力を得て、最後の御奉公を全うしたいと決心していますのでよろしく願います。

本当の文化国家へ脱皮する過渡期の故か、多事多難であった昭和四十一年を送り、新らしい年を迎えました。何がそうさせるのか、年の瀬というのは慌だしく、おしつめられた様な気がするものでありますが、年変ると同時にホッとして安堵し、のびやかな気がするものです。同窓の皆様もよい新年を迎えられたことと心からお慶び申し上げます。

新潟高校はよい生徒、よい職員よい伝統に恵まれた、よい学校だと思います。然し広く全国を見ますと上には上があり、現在に安住してだけはいられないと思います環境も一流校に比べて必ずしも満足できないところがあります。

最近同窓会も漸く組織固めが出来、活動も活潑になって参りました。今必要なものは先輩からの刺戟であると思います。

どうぞ皆様、全国的に御活躍いただくと同時に、母校を愛し、忘れず、後輩指導の為、一臂の労を惜しまないで頂きたいと思います

会報発刊にあたり御挨拶と兼ね年頭の御祝いを申し上げます。

人事転変うたた感あり

幹事長　斉藤希弌

先ず、お互い、健康で無事越年したことを心から慶祝いたします

昨年四月大きな期待を寄せて迎えられた母校の同窓小野塚忠義校長は、十一月一日僅か七ケ月の在任で県教育長に栄転し、後任として奇しくも小野塚校長と同期の三四回の渡辺芳雄氏を迎えることになった。

雄図空しく中途にして去らねばならなかった小野塚氏の胸中は察するに余りあったが、氏の卓抜する英才をより大きく高い場である本県教育の刷新に振う意義を鑑がみる時、われわれは氏のために心から欣んで拍手を措しまなかったのである。

渡辺氏は、余りにも突如たる意外の任命で責任の重大さに心惑うばかりであると、十二月の歓送迎会の席上で謙虚さ溢るゝ挨拶をされたが、われわれが氏に望むところは、氏の人格と識見を絶対信頼するが故に、右顧左眄することなく信念と勇断を以て一切を処理してほしいと云うことである。母校の興隆と云う又とない大きい目標に、揮身の情熱と抱負を注ぎ尽し得る今こそ、氏の教育者として、又同窓としての本懐も極わまれりと云うべきであろう。本会としても協力一致して支持することを表明したい。

特に、長谷川寛前会長は、真に本会中興の祖とも称さなければならない大功労者であられただけに突然の悲報はわれわれにとって大きな衝撃であった。

坂口献吉、金子義晃両先輩の相次ぐ逝去も、つい前号に栄光に輝く叙勲のことを記事に紹介した直後であっただけに、われわれの哀悼の念いは、一入深く大きかったのである。

坂口先生は、晩年病弱の身をひたすらいたわられて会には殆ど出られることはなかったが、重要な問題についてお尋ねすると、いつも真率な態度で正確な判断と助言を与えられた。

静かにして勁い――高風清潔まことに稀な君子人であった。

金子先生は、会にとって亡くなられるまで現役で、東京同窓会の幹事長として、その温容襟度は在京同窓の均しく敬慕して止まぬ文字通り大黒柱の存在であったが、青山斎場の葬儀に参列してその遺風の広大さに、今更ながら胸底の驚きを禁じ得なかった。

尚、渡辺憲一郎氏ほかの本会に深い有縁の諸先輩に対しても、共々ここにあらためて敬弔の意を表するものである。

本会の逐年の発展と対照的に、そのことに最も貢献のあった功労者を、こんなに相次いで一ぺんに見送らなければならない現実に直面すると、常日頃仏心に遠い背教の徒（やから）ではあるが、一瞬ものあわれに首（こうべ）も垂れる思いに、ひたと打たれる次第である。

諸兄よ、心して体を鍛えようではありませんか。

退任挨拶

前校長　小野塚忠義

この度、突然、県教育長を命ぜられ、母校を退職することになりました。

春来て秋に去るとは渡り鳥みたいで、だいたい校長としての責任期間をつとめていないと、関係者からきついお叱りを蒙りましたが母校勤務回数三回、年数も相当あるのであるからと、特別のおはからいで転出のお許しをいただきました。

母校に帰って、これで最後の御奉公の場所もきまったと、教職員の方々と相談したり、生徒と会ったりして、着々、当今ばやりのビジョンとやらを描き、先ず、ちょっとばかり、校舎再建と新潟地震の災害復興のために荒れた環境を整備する仕事をはじめたのでしたが、それも中途で完結していないのは誠に遺憾至極です。

「新潟高校生はファイトがないぞ」など同窓の大先輩からお小言をいただいたこともありますが、ご心配はご無用、俊秀の集りであり、大学進学準備のため体力の練磨にいささか時間不足はあるが、「先ず体力であるぞ」と指導に抜かりはありません。新しい時代を招き得る本当の意味の近代的青年の教育が行われていると確信します。

私の後任には、同年同窓の渡辺校長の就任をみることができました。母校に心配の種は一つもありません。

今日までの同窓会員、その他関係諸氏のご厚情に改めて厚く御礼申し上げます。

昭和四十一年度 青山同窓会総会報告

一、総　会

七月二日（土）午後四時母校体育館一階で開催

(1)会務報告　斉藤幹事長

(2)東京支部状況報告

湊元克巳氏

中村幹男氏

特に中村氏(55)回は第五〇回以降の東京在住同窓生の名簿発行に尽力され、その結集状況報告のため出席された。

(3)議事

イ昭和四〇年度決算報告

斉藤幹事長より説明承認

ロ昭和四一年度予算案

斉藤幹事長より説明原案通り承認

ハ会計監事選出の件

会長推せん動議成立し、次の二氏が選任された。

沢山　巌(35)回

福山　健(39)回

二、懇親会

総会後体育館二階で午後五時から懇親会が開かれ、三三〇名出席、先輩諸兄から多額の寄贈を受けて極めて盛会のうちに終り、それぞゝ第二次会へと流れて行った。

(1)先輩寄附　四九、〇〇〇円

ビール　七打

(2)賞品授与（出席良好の期に）

一位　六一回　ビール一打

二位　五五回

三位　四六回　ビール半打

四位　五九回

特賞　通信生

昭和41年度青山同窓会収支予算書

収入		
項目	金額	説明
入会金	150,000	生徒1人100円 1,500人分
新卒業生会費	250,000	新卒業生1人500円 500人分
会費	250,000	1人500円 500人分
計	650,000	
支出		
項目	金額	説明
会報印刷費	100,000	年2回発行印刷代
総会会合費	100,000	総会・役員会・新年会補助，東京総会・支部総会出席会費，その他会合費
人件費	100,000	職員給料手当
通信費	60,000	会報発送，諸案内発送郵便料，振替料負担金
印刷費	30,000	趣意書，振替用紙・封筒，諸案内状印刷代
慶弔費	20,000	会員慶弔電報料，香典，離任職員記念品料
卒業生記念品代	80,000	卒業生におくるバッヂ，湯のみ代
青陵祭補助	20,000	
予備費	30,000	
雑費	10,000	
積立金	100,000	
計	650,000	

校庭の環境整備ずすむ

校舎の建築も一段落した。本年四月、小野塚校長は着任と同時に校舎の環境整備に着手された。

今まで校庭には外柵がなく、外部の人が自由に出入することが出来た。玄関前のアスファルト広場は午後になると子供達の自転車競技場に変り、校庭は大人、子供のあそび場になっていた。

学校の遊休地面を地域の人々に利用していただくことは、必ずしも悪いことではない。

しかし玄関前に、授業中から子供が遊びまわり、校庭の樹木を損傷し、あるいは整備なったテニスコートを下駄ばきで歩かれたりすると、学校としては大いに迷惑するところである。そこで校庭周囲を整備して無用の人々の入ることを幾分でも抑制し、教育の環境としてふさわしい静かな雰囲気をつくることになった。勿論、地域社会の方々に利用していただくことをこばむ意志はないのである。

先ず正門に新らたに内側に門柱を二本つくり、鉄扉を設けた。夜間は正面の扉を閉じて、通用門だけを開けておくことにした。校舎に向って右方、関屋小学校側には通りに下る坂道があったが、ここは松波町方面から来る道と三叉路になっており、生徒が自転車で下ると、事故をおこす可能性がありバスの運転手からも要望が出ていたところであったが、ここを木柵で仮とじし、将来は土止め工事とともに永久に閉ざす予定である。

その代用として、体育館わきに裏門を新設した。始業後は閉門することにしている。

校舎の西側、つまり念仏寺側に約一〇〇メートルをブロック屏とした。ここには簡単な金網の扉を設けて、必要な場合のトラックなどの出入口とした。

松波町側の土堤には古枕木を打ち、鉄線を張ったが、ここに小野塚前校長の知人の寄贈になる桜の苗木を一〇〇本ばかり植えた。西側のブロック屏のわきにも一〇〇本ほど植えたので、やがて幾年か後に、新潟高校の校庭周囲が桜花らんまんとなる日を楽しみにしている。（本校教諭　松田一郎記）

事務局便り

◎昨年は同窓会の巨峰ともいうべき長谷川、金子、坂口の先輩を失って悼ましい年であった。時の流れは如何ともすることが出来ず同窓会もより若い世代によって受け継がれてゆかなければならない。最近五十回前後の同窓生の活躍が盛んになって来たことは、まことに喜ばしいことで、これらの人達が、中堅となって同窓会活動を発展させてくれることを期待してやまない

◎同窓会費の徴集を初めたところ予想以上の成績で三十数万円の会費が昭和四一年度分として納入されている。勿論県外の会員からも多数の納入があった。今春卒業の新会員も第一回会費を納入することになっているので、同窓会の財源も在来にくらべて、ぐんと豊かになり、事業経営もやり易くなり、同窓間の親睦を深める方面にも種々な手を打つことが可能になってきた会費納入について格別なご協力をお願いする次第である。

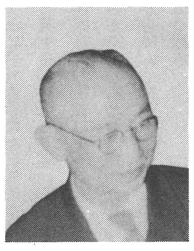
◎クラス会には（学年単位）同窓会から祝酒を差上げることになっているので、クラス会を開かれる時は事務局に連絡していただきたい。

◎同窓会報は第四号発行の運びとなったが、部数を増し多数の同窓の手に配布しようと努力しているが、通信費等の関係で、意にまかせない点もある。市内関係は職場単位に発送することを考えているので、各職場では、どなたか中心になって、配布体制を整いておいていただきたい

◎四二年は七五周年に当る。十年一回の名簿発行では、価値が薄らぐので、今年改訂発行を計画している。各期とも幹事中心となって会員の消息調査に乗り出していただきたい。

長谷川寛先生の真顔・横顔

文　小山久一（同窓会幹事）
え　富川潤一（同窓会員）



顧みて一九六六年はわが青山同窓会にとって人事の去来まことにあわただしい年であった。

三校長の送迎は致し方ないとして、我等の敬愛する大先輩坂口献吉、長谷川寛、東京の金子義晃の三氏を次々と失ったことは同窓関係者のひとしく痛恨を禁じ得ぬところであろう。

とりわけ長谷川先生は多年に渉り同窓会長として本会の維持発展に寄与せられて居ったのでその馴染深さは又一入のものであった。

昭和二十九年春校舎焼失による復興事業も同窓、関係者各位の尽力により三十年春には第一期工事も着工されたのであったが、これに附帯する地元負担金の消化やこれに平行する官公方面への政治折衝などが随時つきまとう問題として復興期成会長（同窓会長があたる）という役目もなかなか心労多いものであった。

先生はその頃持病のため健康に支障あり勝ちであったが、本町白勢邸内に設けた復興期成会事務所へは毎日必ず出勤され、会務の状況について適切な意見、方策を与えておられたのであった。

三十二年六月、遂に健康上意の如く活動が無理と感ぜられ、新会長による、より活潑な運動を期待したい旨、私に洩らされたのであったが先生の御容体と平素のかけ引なしの性格を知る私は早速素直にこれを承け、議題として委員会に持ち出してしまった。もちろん慰留の意見も出たが、私は引退が適切である事を力説した。そして結局鍵富現会長にお引き受け願うことになったのであった。後日これについて私として内心先生に対する敬意に於て些か手管（てくだ）が足りなかったのではなかったかもう少し慰留の時間を延ばして事を運ぶべきではなかったかなど、悔みがあったがもちろん先生の性格はそんなケチなものではなかった。

尚元来非能率的で青山クラブの世話人位が性に合ってる私が降って湧いた復興期成会の会長補佐みたいなものにどうしたはずみかなってしまい不適任さに我乍ら閉口しておった矢先とて、充分の補佐が出来なかったことを心底に深く詫びつゝ、その任を活動家の斎藤氏に代ってもらったのであった。

■青山クラブの事

青山クラブと言えば大火前万松堂の二階にあって、私がそこへ出入し始めたのはたしか二十四年頃だったか。当時の同窓会活動というのは現在のそれに比し（現在の幹事達も現在の活動にいろいろ不足を訴えてはいるが）組織、経費等の面に於て、誠に貧弱なものでわずかに青山クラブ（それも維持会員六、七十名位）が拠点となって活動らしいものを続けておった。

そこへは会員達同志相寄り談論し、注文すれば飲食も可能であったし、毎月一回講師を招き講演を開いたりしたものであった。

初め頃、常連の大部分は我々より遥かに大先輩が多数を占めたが次第に後輩連もふえ、和やかな中にも長幼の序程よくととのい、何となく明治的長閑な雰囲気が漂っていた。

全体に質素なものではあったが質実剛健を誇る名門校の同窓生集会所として決して品位をそこなうようなものではなかった。ここの運営は主として故本田喜作氏があたっておった。青山クラブの印象的なのは大道無門の四文字の大下げ額や靱（じん）さん（笠原画伯などと言わぬ方が親める老先輩）描く創立当時の旧校舎全景の掛軸であった。この画は二十九年早々都合により学校へ移したところその直後四月校舎と共に焼失したそうで恰度焼かれに行ったようなもので、今日ではスッカリ変って仕舞った当時の学校周囲を偲ぶ唯一の実写絵として洵に残念であった。

講演には会津博士や青木得三先生が連立っていろいろ話されたこともあったし、石黒先生（元軍医中将）の港々の万国女の品定めの話など流石にこの道にかけての大家だけあって、大変面白かった記憶がある。

クラブは一応独立採算制でやっておったが営利商売でない建て前だから経営上とかく不如意勝ちで順調にいってとんとんという程度で何かとしわ寄せも生じ易く、最後のけじめはきまって先生の身銭に頼らざるを得ず先生も又、対外的には自己の責任の如き考えをもって見捨てることなく援助されたのであった。私もいろいろやり上につき先生から世話人の一員として参与するよう命ぜられ、そんな関係から、人一倍先生と身近に接し、時には酒杯をはさみながら談笑する機会も重なったが私と親子に近い年代差は感じられなかった。そんなわけで私は私なりに先生の「人間」について潜越ながら解釈をもっている。

なおついでながら、―このクラブは同窓会がその活動を校舎再建一本にしぼる必要上維持費の調達が過重負担になるため一時休止したが三十年の大火で市内の建物事情が変ったためつい今日まで再開の機がなかったが我々の考えは決してつぶれたとは思っていない。

しかしその後の同窓生の構成もかわっていることだし、願わくばこれから中堅若手諸君が中心となって新しい構成、運営で再建をはかってもらいたいと思っている。

■直情径行の人

ここで明白に断わらねばならぬ事はこの文はあく迄自然人としての先生、而も私の目という「葭のズイ」からの範囲であって先生壮時の該博な法理論をひっ提げ法曹界その他に縦横の才腕を発揮された権威の姿を描こうとするものではない。たとえ自然人としたところでその様に社会と復雑、多面な接触によって出来上った人物を簡単に「直情径行」と言った斧で一えぐりする様な言葉でカテゴライズ出来る訳はなく、第一そんな取扱いする事自体大変失礼なことであろうが予めお許し願いたい。

先生は己の欲する処に徹底出来た人であった。趣味も多方面に渉られたが所謂よき時代の富裕な紳士の常として好みは概してアリストクラシーであり、ハイカラであった。学生時代から山を愛し狩猟撞球、ダンス等、皆それぞれ月謝以上のものがかかったものであった。先生は旅行してたまたまその土地の郷土芸能が気に入るとそれをマスターする迄は幾日でも動かないのだという寓話がある。

青山クラブ当時、浩然の気を好む我々も年輩の大分違う先生を、そんな場所へ強引にお誘いすることは多少憚ったがそれでも先生が案じ顔で「小山君、ああいう方面の景気は近ごろどうかね」という下問あり次第、百聞は一見に如かずとばかり、実情見学の計画はたてられるのであった。

そこで、我々が野暮な悪声で徒らに糖味噌をくさらせるだけにひきかえ、先生興到ると力弥損やおよね損の合の手でないとなかなかうまくゆかないおはこの「館山」で暫く一座をシーンとさせられたものだった。

晩年といっても十年くらい前までは雰囲気と、心身に与える健かさを楽しむという意味において、ダンスは確かに楽しそうであった先生は、終戦後の世相未だ安定せぬ二十二年春社会党より推されて市長選に立候補されたことがあった。富裕の人が何故社会主義政党から立たれたか。これを打算と保身にのみ重点を置く普通常識から見れば誠に解せないことであった俗人達は先生はおだてられたのであろうと推断した。

否。矢張り然り。観方によっては正にそういうことになるのである。先生は元来素朴なヒューマニストであった。かって幼稚で露骨な資本主義が跋扈した明治、大正昭和初期には貧しい労働階級ほどあわれなものはなかった。資本階級のご機嫌如何で一家路頭に迷わねばならなかった時代にテロにより国家転覆をはかる凶激な無政府主義者とは別に弱き者は助けねばならぬという以外の何ものでもない純粋な宗教家、人道主義者達は弱者の味方として危険な抵抗運動を起した。官憲は両者を一括して危険思想と断定して酷しく断圧、検挙・投獄した。

危きを恐れる一般世人は後者の悲壮な訴えに対しても立止って耳を傾ける事さえ冷淡であった。

金持ちではあったが直情の若き日の先生は後者の考え方も進んで研究理解することに吝でなかったであろうと想像することは容易なことである。

先生の脳裡には戦後日本の労働運動も社会主義も斯の如きものとの残影が漂っていて宗教的人道的発想のもとに敢えて立候補されたに違いない。加うるに推せん者達は名利を以ってする代りにこの点にはバカ弱い先生をおだて上げたのであった。この読み違いは、決して先生の人格価値をいささかも損するものではなく、この種の運動が如何にあるべきかは今だに果しなく論争せられ、正誤の判決は何人も下し得ないのである。

選挙は幸いにして駄目であった幸いに…。戦後日本の社会主義労働運動は先生の到低同調出来るようなものでなかったし、万一不幸にして当選しそれを機会に先生がこの運動体に強く執拗に巻き込まれて居ったら、おそらく後日激しいジレンマに陥り今日まで続いた静かな幸福は破壊されて居ったであろう。そして後日に至ってこの種の問題で先生は身を以っていやという程不愉快な思いをされるのであった。

因みに昭和初期頃までの略譜をあげると、

「明治十九年名望家長谷川寛二氏長男に生れ―中略―

第四高等学校を経て、大正四年東京帝国大学独法科卒業、直ちに宝国石油会社に入社、その非凡なる才腕をもって業績顕著なるものあり。同十一年弁護士開業、その深淵なる学識と鮮かなる弁論振りをもって盛名をうたわれ、いまや県下法曹界の重鎮なり。さきに市会議員として市政に参与し、功績あり。明朗濶達なる紳士にして、旅行登山を愛しアルピニストとして斯界の先輩たり。宗旨は浄土宗（昭和初期発行の越佐傑人譜より）

かくて先生の足跡を概観して言えることは、一貫して自由人であり進歩的であり、情にもろく悪を憎む人であり、時には蕩児でもあった。

この人は又、嘘を言わぬかわりに他人の言にも疑をかけなかったのでだまされたこともあったであろう。事実よくかつがれ、まつりあげられた人ではあった。

学識、門地、資産に恵まれて居ただけ尚更このような性格をもった人は一般に無事を以って良（ヨシ）とする名門の当主として必ずしも無難の人ではなかったかも知れない

■君子豹変

我々凡夫のともがらは人生を考えるにあたり、とかく唯物的判断におちいりやすい。人生の充実を地位や、物質の満足によってのみ足れりとし、そこに一片の反省悔悟の要なしと嘯ける人はそれはあまりにも教養、情操の欠如しておるか、或は自己を麻痺せしめて虚勢を張っている人かである。

斯様な事は抽象論や他人ごととしては誰でも言える事だが、さて自分を偽らず厳しく笞打てる人が、実際にどれだけ居ることであろうか。

而も他に慰めや心の紛らわしにこと欠かぬ恵まれた環境の人なら尚更のことである。

寛先生は狡猾な政治家の様に逃げ隠れて澄まして居る器用さは無い代りにジイッと腰を据えて、己が人生について石の如くロダンの如く考えに考えた。

欲する処へ迂回し、直情に走り気骨ゆえにつまづき、放縦に流れもした越しかたを、あたかも無風平担よりも景観に魅されて、峻険な途を選び辿ったアルピニストのように振り返った。そして己が身に沢山な手傷や、足傷を発見したついにこの内剛の性格は、必然に人間であるための苦悩に突き当り敢えて己を苦しめ、これをキリストの博愛によって解決すべく、世相人心混乱の昭和二十三年秋、翻然カトリックの洗礼を受け魂の行脚に再発足された。クリスチャン名、パウロ・ハセガワ・ヒロシまさに君子豹変すと言うべきか。

パウロ・ハセガワは時折悩める高雅な人の表情と思索的な態度で人生観について語りかけられる時がある。悩めるというより哲学していると言った方が当てはまるかも知れない。

そんな時イタズラ好きの私はフとロダンの裸の石の人にもっと崇高さを加えようとして胸に勲章をブラ下げて見たら如何な効果が出るだろうかと心秘かに考えて見た結局、先生はキリストによって人間苦を喜びに置きかえ得て昭和四十一年十一月二十三日、居住の地青山の林の中に、安らかに昇天された。

■あとがき

敬虔な神の子、パウロ・ハセガワは我々に対しては老書生寛先生であった。先生はその名の如く寛濶でデカンショ気分も又大好きであった。従って青山クラブや不識庵会（そば屋の会ではない）等で先生を取り巻く悪老童達も多かった。療養中の先生を恋う念しきりで、原隆太郎、堀保利両氏あたりから、「おい、一ぺん先生をお訪ねする段取りをはかれ」と攻められて居ったが、宮尾益夫氏の内偵によると却ってご病状に拍車をかける結果になることを恐れ、思いながらもためらって居たが、突然の訃報に接し皆心残りに思って居ることであろう。

その中同志語らい先生を偲ぶ会でも賑やかにもうけたいと思っている。

以上終りにあたり先生を懐しむ情の発するまゝに楽しささえ覚え哀悼の表示もおろそかとなり、文中至る所無礼な表現を用いご遺族の側よりお怒りもあろうかと案じては居るが、この点は呉々も平にご宥恕お願い申し上げる次第である。

同窓会に出席して

東京青山同窓会総会

昨年の春以来第五〇回以降の東京青山同窓会の人達が、名簿の作成や組織の結集に、各期の集会を開いたり、数回の委員会を持って総会開催の準備を進めておったが昨十一月十八日、いよいよ総会開催の運びとなった。

特別に出席を求められたので、私の教えた五一回以後の連中の顔を思い浮かべ、再会の喜びに胸をはずませて上京した。

会場は銀座の朝日生命館地階のレストラン・ニューカワナ。出席予定が百名程度と聞いておったのが、全く立ったまゝ身動きも出来ない程に予定を越えて一八〇名も出席されたのには、本部も顔負けの驚きであり喜びであった。

各大学にポスターを掲示して大学生の同窓生にも呼びかけるなどその意気込が察せられ、女子学生を交えた十数名の大学生も熱気のこもった渦の中に溶けこんでいた本部からは阿部副会長、斉藤幹事長、岩野先生にも出席していただき、磯前校長や鈴木、伊藤、大橋小日向の旧職員の顔も見え、東京支部の山内会長、湊元幹事も出席されて、非常な盛会となった。

総会次第

司会　福田　満(58)

開会の辞　副委員長倉品省三(63)

挨拶　委員長佐々木良明(50)

事務報告　常任委員中村幹男(55)

会計報告　会計委員三条昭典(53)

来賓として磯前校長、阿部同窓会副会長、斉藤同窓会幹事長、山内東京同窓会長の祝辞、挨拶があったが、全部の人達の顔が見渡せない盛会のうちに青陵健児の心が一つとなって「あゝ青陵に精気あり」の意気が高まって行った。

肩を組みあって青山青山と声高らかに唱う頃、会は最高潮に達し、すべてが紅顔昔日の若い光を追って陶然とした雰囲気に酔い吾等皆同胞の一つの心に固まって行くのであった。同じ釜の飯を食った同窓はかくも親しく一つに溶けこめるところに同窓会存在の意義があるのであろう。副委員長北井一郎君の閉会の辞で一応会は閉じられたが、それ〴〵各期毎に第二次会に去って行き本部として幹部諸君の慰労の会合をと思ったのに漸くのことで中村君一人を引止め代表として感謝の小宴に出席してもらった。

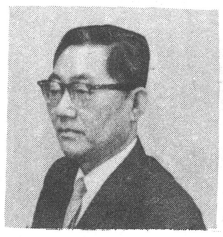
同窓会は今年七五周年を迎えることになったが、これ等の人達に中心となって活躍していただかなければならない時代となって来たこの時期に活気溢れるこれら同窓の存在は同窓会の発展にとって、誠に得がたい貴重なものとの感を深くして帰って来た。

（沢山　記）

坂口さんを偲ぶ

二十一回　江口文助

江口電業社社長



坂口さんと私は幼少の頃新潟市西大畑町に住み、土地の大畑小学校とつづいて新潟中学校を大正三年第廿一回生として卒業し、今日に至るまで約六十有余年に及ぶながい交遊でありました。

この度坂口さんが昭和四十一年八月十三日卒然として亡くなられたことは余りにも悼ましく、過去の交遊関係が油然とわき、懐しき思い出にふけるのであります。

この年は吾々廿一回生にとって全く不運の年で、大物の同級生が続々として逝かれ坂口さんの外に十一月には金子義晁さん、前年には伴純さんと他界せられ、大ショックを受けたのであります。

中学卒業後坂口さんは早稲田大学政経学部に進まれ、私は東京に就職しました。坂口さんは父君仁一郎先生と戸塚にお住いで、私も近所にいましたのでよく行き来していました。

父君は当時まだお健在で、お若き頃は県会で地方政界の重鎮でいられ更に出ては国会にお活躍、時の大隅重信、加藤総理大臣より非常の信任を得られ南工大臣に推された程ですが之を堅く辞し、一生政界の表面にたたれず、名誉や利権に恬淡たる高潔な方でいられました。

又父君は政治家というよりもむしろ詩人書豪が本命で五峯と号し中国一流の詩人が五峯を評して、国分青涯先生につぐ日本当代稀に見る逸材と絶賞されていられた程でありました。

彼の有名な市島春城先生とも交遊深く、その書は愛好家に非常に垂涎されており、その著書北越詩話は畢生の名著と言われております。

坂口さんの一生をかえりみますと、その高潔なる気迫、文学才能は父君の伝統深く、坂口さんは勿論のこと令弟安吾先生にも脈々として引きつがれ、春城先生は坂口さんを見て、この子出藍の才ありとかわいがられた程であります。この頃から文学方面の交際が多かったものです。

あるとき坂口さんのお誘いで北原白秋先生をお訪ねした事があります。彼の有名な北原白秋先生作詞、梁田真先生作曲城ケ島の雨、「雨はふるふる城ケ島の磯に利久鼡の雨がふる……」はその作曲と相まって、当時吾々多感な青年に盛んに愛唱せられ、殊に私は中学時代水泳に舟で日本海の荒波を櫓で漕ぎまわったものですから、この歌がすきでわざわざ城ケ島へ行き、その雨の情景が歌詞そのままなのに感激し、白秋先生に異様の憧憬をいだいていたものでした。その白秋先生を小田原にお訪ねできたのは全く望外の喜びでした。今でも先生の面影と窓越しに見る竹庭の美しさがはっきり印象に残っているのであります。

後年新潟護国神社境内に白秋先生の「砂山」の碑が建てられたのも坂口さんと白秋先生とがこの当時からの深い因縁のたまものと思われます。

坂口さんと母校新潟中学校水泳部との関係も深く、その発展に多大な援助を得たのであります。

その一つ。従来の泳法は所謂古泳法で、それに代って近代泳法のクロール、ブレスト、バック等の黎明期でありました。

母校近代泳法の先覚者山添武氏（故人）山添直氏（現小田急専務教授）の三兄弟等がその泳法を原書によって研究し、新聞に図解連載発表したりして発展に努力して居ったのですが、これを現地に実地学ばんと、在京の坂口さん、故師尾源蔵先生、故小林享作さん（小林力三氏の長兄）私等とそれに新潟地元の諸兄と相呼応努力し、当時水泳のメッカとして有名な千葉北条の高等師範水泳部へ、夏期母校水泳部員約十名を送る画期的な壮挙を決行したのであります。

大正十年八月の頃でありましたその結果忽ちにして驚くべき成果を発揮し、東北方面の征覇は勿論のこと、後数年にして全国中学校水泳大会に於て、吾が北村博繁氏（三二回）が一〇〇米自由型に優勝するなど、輝しき不滅の金字塔をうち樹てるに至ったのであります。

坂口さんは生来頑健でなく蒲柳の方でありました。それで遂に病をいられ、十八・九才頃茅ケ崎の南湖園にながく入院し療養せられ遂に之を克服せられた事など、この頃の苦難時代を思いやられずにはいられませんでした。

坂口さんはかねて当時の大政治家犬養毅先生が身に七病をもちながら、何等これにとらわれることなく日々激務に精励していられたその不屈の精神力にいたく感激していられましたが、坂口さんが一生の病弱苦を口にせられず、人生七十一年の多端な一生を終始せられた不撓の気迫には、ほとほと敬服するのであります。私が曾て人の健康には一病息災が一番いいと言いますと、坂口さんは「私は多病長寿」とうそぶいていられた程悠々たる心境でありました。

坂口さんは残生の奉公として病躯をおして最も熱烈にその建設に努力せられたのが例の新潟県震災復興記念会館であります。

坂口さんは塚田知事の発表した県民会館、美術博物館の建設企画に多年新潟県美術連盟会長の立場上、民間人唯一の準備委員を命ぜられたのであります。この知事案には始め内外より反対も多く、之を打破して公会堂並びに美術博物館を全世界にも類のない独特の理想像を作りたい悲願をたてられたのであります。

次に坂口さんの意見を記載して見ましょう。

白山球場に建設が最適

文化発展をになう新潟県民会館

坂口献吉

現在問題になっている新潟県民会館とは何か。これは私の理解するところでは、塚田知事の新講想で本県百年の大計として提案されたものである。この中に三つの重点がある。

其の一つは約三千人程度も入れる大ホールを建てることである。

現在の新潟公会堂は改修して千二百席の新設備で使用できるようになるとのことであるが、伸び行く新潟市に、三千人席のホールが必要になることは明らかである。現在でも新潟大学内の分科会でさえそれができないで、いつも他の都市に開かれている。日本の都市の格式はこれらの設備によって順位が決まっている。仙台は最近まで大ホールがなくて困っていたがこんどりっぱなものができたので一段格式が上がった様である。新潟はグズグズしておれば金沢以下のものとなろう。そうした設備のいかんが、一般商店、旅館の繁栄にも影響してくると思う。

第二の重点は新潟県博物館をつくることである。古代から新潟県の出土品、中世現在に至るまでの新潟県の歴史を語る貴重な資料は今や各所に私蔵されて、湿気その他の為に刻々いたんでいる。これを完全な収蔵庫に保存預りすると同時に、許されるものは、教育資料として展覧ができるであろう。これは本県の郷土愛につながる生きた人作りの仕事である。

第三の重点は新潟県美術館の建設である。新潟は地震に敗れた。しかし人間は物に敗けてはならぬ精神の力で立ち上がらなければならない。

小林病翁の米百俵の精神こそ震災復興記念として意義あるものとなるだろう。まず広大な緑地帯をつくり環境の美をとりいれた館を建て、そのなかに絵画、彫刻、工芸、書道、民芸品など各種の美の高き精神にあふれた作品を置き、この殺伐な世の中に安らぎと慰めと、そして生きる精神を高揚せしめる、庶民が楽しめる美術館をつくるということである。

以上三つの重要建築物を一ヶ所に造ろうとする構想は、今や期せずして各県とも苦心努力しているようである。いわゆる大県といわれる新潟県にこれらの設備がなくてなんの大県であろう。なんの文化生活があろうか。私はかく考えるとき、新潟市のいずこにこの重要建築物を建てる場所があるかを人々に問うに、県の当局もいろいろ調査研究されたであろう。その結果障害の少ないところ、大衆の出入の便利なところ、交通の便のよいところ、火災などの恐れのないところ等々を考えて、白山球場以外に絶対にないことが結論された。白山球場はいかにも惜しい。しかしこれに代わる野球場を他に造ると塚田知事は約束していられるのだから、不便をしのんでも白山球場を譲ることが、本県の長きにわたっての健全な成長に無限の価値を与えるであろうことを確信する。

という雄大適切な計画であります。坂口さんはこの構想にあたって、北方博物館の伊藤さんに依頼して欧米各国のものを詳細に調査し、更に吾が国情に適するものを定められたもので実に用意周到なものであります。

しかしこれがため病気が更に亢進し、遂に不帰の客となられたのは惜しみても余りあるのであります。やがてこの会館が来年の十一月白山球場に堂々と、天下に偉容を誇る県民会館が出現するとき、坂口さんは誰よりも多く地下に喜んでいられることを信ずるのであります。

坂口さんは天下の多くの名士文人とも交際広く、殊に電通の故吉田秀雄先生とは刎頸の交りでありました。

趣味は碁、絵画、短歌、書道、てん刻等広く殊に少年時代一時画家に志ざされた程でいま坂口家にある父君仁一郎先生の油絵の肖像画がありますが、これは父君晩年のお病中のもので、坂口さんは痩せられた面影に涙を流しながらうつされたものとおききしています晩年はもっぱら墨絵でよく庭や道ばたの野草や草花を折りとって、下図なくそのまま細筆でこくめいに画かれます。吾々から足下に踏みにじられ抜きとられる野草ですら、坂口さんの筆にのるとそれは掬すべき趣が出ているのであります。野草の美は坂口さんから初めて知り得ました。

書道については会津八一先生に師事すること深く、其の書を時折取り出されて楽しんでいられました。殊に先生の秋艸道人学規は人生の指針として推奨し、また筆をとって写していられました。

秋艸道人学規

一、深くこの世を愛すべし
一、省みて己を知るべし
一、学芸を以て性を養うべし
一、日々新面目あるべし

短歌については青年時代より白秋先生、山梨の佐野四郎先生、故中村正爾先生、新潟短歌界の野地先生、吉野秀雄先生、檀一雄氏とも交際深く、また坂口さんの作品も非常に多いのであります。

新潟放送、日報編集纂の坂口さんの追悼録を見ますと交遊関係に出された書簡がたくさんのっていますが、坂口さんは返信のとき日がたつとその感じが薄れるとて、大抵即時書かれるとの事です。その為か文中詩や歌など適切に引用せられ情味溢れ、書簡全体が一編の詩文を読む心地がするのであります。

坂口さんは晩年までも絶えず絶えず、修養につとめていられました。その一つ二つ。

昭和三十九年の日誌に

一月一日

先ず臨終の事を習ふて後、餘事を習ふべし——

という日連上人の言葉をしみじみ味ふ。

元旦　朝　秋艸道人学規と右の日連上人の教えを色紙に書いた次にこれは私が直接坂口さんからおききしたのですが、坂口さんの残生を捧げて努力せられた例の県民会館が建設決定になると「張り」を失い淋しいと、この悩みを日頃尊敬する豊実の今川文焼老師に訴えられた。すると老師からは「人生には余生も残生もなし」と一喝三十棒にあい、「善哉善哉、会津先生の学規を忘れていた」とかつ然大悟それより「終りなき目的の追及は楽しく、芸術は永遠なり」と篆刻を始められた事など、特記すべき佳話と云いましょう。

そのせいか晩年の坂口さんの面影にはどことなしに、高徳枯淡な風格がにじみ出ていられるのであります。

坂口さんは仏教信仰にも深く、すでに幽遠の境地に達していられたと思うのであります。

坂口さんはいう。

「南無一念無上道

私が念々心に唱えるのはこの一語である」と更に「死とは落葉の地に帰することである。淋しくはあるが楽しいもの」と辞世に述べていられたのです。坂口さんの一生の信条は——

坂口さんはいう。

「人生は信、言い換えれば誠の一語につきると思います。人と人とが信じ合うことこそ何にもまさる尊いことであります。この邪悪に満ちた世相のなかに、おたがいに信の灯がともれば如何ほど美しい楽しい世の中になる」とだから坂口さん更に、

「地上は美しき哉心ひとつで」と最後に絶叫して逝かれたのであります。

右のように私は坂口さんの思い出を、いろいろつづってみましたが、その一生を通して特記すべきことは、坂口さんが全生終始一貫報道関係に尽瘁せられた偉大な功績であります。

これがため、昭和四十年十一月三日畏くも皇居に於て勲三等に叙せられ瑞宝章を授与せられ、更に昭和四十一年八月十三日正五位の追贈を賜った事であります。

坂口さんのたくさんある短歌のなかから次の数句を記し、日頃の悠々自適の境地を偲んで見ましょう。

四季の歌　坂口献吉

春

朝あかり姿は見えぬ鶯の
鳴く音もれくる庭の竹藪

夏

四方の草ひときは映えて
もゆるとき

あかき夕日の佐渡に入るとき

秋

べに蓼のひそかに咲ける
やぶ小みち

惜しみなく照る秋の日ざしは

冬

夕暮れの海紺青にしづもりて
松風の音空渡るなり

酒一杯の味

真夜中の一杯の酒に身を托し
僅かに生きる老の身となる
一杯の酒に加える塩辛の
絶味の味をはじめてぞ知る
七十にして始めて覚ゆ酒の味
世を呆けてぞわたり終らむ
古人みな酒に酔いてぞ憂い去り
味を占めたる別天地知る
春城よ安吾よ偉らしひとり飲む
酒の味をぞ誇りたりけり

以上

後記

私は坂口さんの一生を研究すればする程、坂口さんの偉大さを知り、私ごとき者が追悼記をものし得られるものではないと判りました。しかし私は私なりにどうかして、坂口さんの真実を書きとめ様かと一生けんめいにやりました。至らぬ点は何卒おゆるし下さい。

金子さんを偲ぶ

三十回　湊元克巳

学校図書専務取締役

金子さん。

日がたつにつれて、兄を喪ったような淋しさがひろがります。

去る六月二十九日、同窓、渡辺憲一郎氏の葬儀で、青山斎場の青葉のかげで、互いに悲しみを分ち合ったのが、あなたにお目にかかった最後でした。

渡辺さんの葬儀がはじまる前に私の起草した弔詞について、予めうち合せをし、山内会長が出られなかったので、東京青山同窓会を代表して、あなたが弔詞をよまれたのでした。

その切々として、しかも、壮重で、力強く故人によびかけるような、あなたのことばは、今だに一語一語、私の鼓膜にきざみこまれて忘れません。

そのあなたが、わずか半年後に同じ青山斎場の祭壇の上の人となれるとは、感慨無量、なんともいいあらわせない気がします。

あなたは、母校や、同窓会のことを話し合う時は、大病院長の激務の時間をさいて、いつもよろこんで会ってくれました。

東京青山同窓会の在京者の結集ができたのは、名幹事長としてのあなたのお力によることが非常に大きかったのです。

そしてこれから卒業し、上京して、そのはげしい東京の渦にまきこまれる若い同窓の人達の、心のよりどころになるためにも、在京同窓会は温かいホームとなりたい。

そのためにも、もっとまとまりを強めたい。と話し合ったものでした。

東京青山同窓会を、あなたの主宰する、同和病院のホームでやらせていただいたことも数回ありました。

金子さん、あなたはまた私たち在京同窓の健康の指導者でも、相談相手でもあり、数多くの仲間がお世話になって、ただ肉体の健康だけでなく、精神的活力も、あなたによって与えられていたのです。

東京青山同窓会の名物男、師尾源蔵氏、三遊亭円歌師などは、二人ともあなたの病院に入院して、脈をとってもらい、死に水までとってもらったのです。渡辺憲一郎氏もあなたの病院のお世話になったとのことです。私なども、体の調子が悪くなったら、あなたに相談して、その御指導がいただけると、力強く思っていたのでした。

今年の春、医学者として、医師としての功績により、叙勲されました。これはあなたの名誉でもあり、同窓の名誉でした。東京同窓会として、祝宴をやれなかったことは残念であり、かつ申訳ないと思います。

あなたの胸に——同時に我々の胸にも——常に去来してはなれなかった、はるか新潟の母校は、十二月の今頃は、みぞれにぬれ光りそれをめぐる青山の松は、梢を鳴らして、あなたの死を惜んでいるでしょう。

これからは在京同窓は、あなたの心をつぎ、老いも若きも、手をつなぎ、青山健児の歌をうたい、友情の花を咲かせて、郷土や母校のためになりたい。

金子先輩よ、安らかに眠り給え

（四十一・十二・二〇）

竹山初男君を悼む

三十六回　加賀田二四夫
加賀田組常務取締役
新潟県議会議員

しとしとと音も無く降り積る雪の夜静かに故竹山初男君の追憶に思いを致しペンをとる。

中学生活を終えるとすぐ北の国北大の予科に学んだ君は雪の夜静かに智識の追究に、青春の感傷に或は故郷の新潟に思いをはせた事もあろうなど考えながら三十有余年前に遡り君との出合いから数々の交友を思い浮べると懐かしい思い出、淡い思い出おぼろげな記憶が今は哀しい追憶として次々と浮かんで参ります。

田舎の小学校から唯一人始めて都会の中学校（旧制）に学んだ私は多くの級友から田舎者として白い眼で見られがちだった時、君は加賀田君〳〵とあの特徴ある「バス」で私を呼んでくれ友人として交わってくれた、あの君の大らかな友情に対しては今も尚忘れ得ぬ感激があります。

しかも性格はあく迄明るくよく遊び良くスポーツを楽しみ、我々グループは常に君を誇りとして来ました。君が青山野球部の名一塁手として活躍し、私達が応援団席から「竹山君がんばれ」の声援を送ったあの元気な逞ましい体格の持主であった君が、私達に先がけて此のように悲しい運命になろうとは…

昭和十二年に北大医学部を卒業皮膚泌尿器科教室に入局と同時に君の医師としての専門のコースが決ったのであります。

私は土木工学方面に進み、北と南に別れ、大東亜戦争が始まると君は軍医として祖国の急に馳参じ私は鉄道部隊の将校として南方戦線に転戦しました。此の五年有余の戦地生活がお互いを離れ離れにしてしまったが、あの忌わしい戦争が終ると君は、郷里新潟大学医学部泌尿器科教室に転じ八年間の長きに亘り泌尿器科を専攻。此の間、医学博士となられ、又助教授として後輩の指導に当り、或は亦医局長として医学界に貢献されました。

社会が落着きを取りもどしたころ、軍務から解放された私も故郷に帰り、又君との交友が始まったのであります。君は昭和二十九年に伝統ある竹山病院に迎えられ、医学界の至宝であり、新潟市の名誉市民として敬われている岳文荻野先生と、病院の診療と経営の両面に参画され、新潟の医学界になくてはならぬ存在として大いに活躍されました。

新潟大火、それは忘れもせぬ悪夢のような一夜新潟の中心部を一なめにした猛火は遂に病院の大半を焼燼と化したのであります。

其の混乱の中にあって君は良く病院の業務を続け、いち早く再建計画に全力を注ぎ、其の甲斐あって漸次旧に復し施設面に於ても近代的病院の態勢を整い隆盛を重ねて参りました。これから益々院長たる君の活躍が期待され希望に満ちておられた矢先突如幽明境いを異にされようとは、君の急逝の訃音に接した時は唯呆然としてまさかと思い、信ずる事が出来ませんでした。神式による厳粛な御通夜に参列して現実のきびしさにひしひしと胸にこみ上げるものを感じたのであります。

昭和四十一年六月二十五日、新潟大神宮に於て厳かに取おこなわれた告別式に同級生宮尾、樋口、沢田の諸氏と共に参列し、三十六期生一同に代って告別の言葉を述べ謹しんで哀悼の意を表し御冥福を祈りました。

故竹山初男君の五十年来の輝かしい足跡を追憶し、厚い友情を思い返して君の人間味豊かな人格にあやかりたいと念願しつつ旧友と共に霊前にぬかづき最後のお別れを致して参りました。

残された御遺族は奥様を中心として、

長男　順天堂大学医学部
次女　慶応義塾大学
二男　母校新潟県立新潟高校

に在学中のお子様がいられますが君の志をついで立派に御成長されん事を心よりお祈り致します。

泉下の君もやすらかに見守り給え。

西欧の旅から

新潟県高体連事務局長
本校職員　近藤　圓

一、トイレの窓から

去る七月三十一日から八月二十一日の三週間程の間、私は欧州を「体育事情視察」という名目で旅行して来た。三週間といっても往復はSASのジェット機で、羽田コペンハーゲンを片道十五・六時間で飛び、ヨーロッパでは、デンマーク、オランダ、イギリス、ベルギー、フランス、スイス、イタリア、バチカン、オーストリア、西ドイツ、と約十ケ国を一部飛行機、大部分をバスで廻ってきたわけで、正直の処、ヨーロッパへ小便をしに行って来た（いわゆるアメションならぬ）ヨロション旅行程度のものであった。さしづめトイレの窓からのぞいたヨーロッパ窓見雑感でも記してご報告にかえたい。

二、ご馳走攻めの飛行機

私がこれまで飛行機に乗った経験は一度だけ、それも今から約四七年前の話。我が新中玄関前に飾られた水上飛行機に、寄宿舎から抜け出して、夜間こっそり乗って操縦杆を動かして尾翼をパタパタ動かして喜んでいたものだが、恥かしながら後にも先にもこれだけだったのである。それが一躍ジェット機に乗ったのだから正に我が生涯に於ける十大ニュース的価値のあることであった。この年は航空機事故の多かった後だったが、不思議に不安は少しもなかった。人の乗った奴は落ちても、俺の乗っているのは大丈夫という理由のない安心感だったのだが幸い往復共無事だったのは有難いことだった。（それでも保険は五百万円かけた）

羽田を七月三十一日午後九時離陸、かねて旅客機のサービスの良さは聞いてはいたがこれほどまでとは思わなかった。東京の夜景の素晴らしさを後に間もなく高度一万メートル、九時四十分に第一回の豪華なご馳走（夕食らしい）、一睡りして夜中の二時、第二回のご馳走（朝食らしい）。なる程、カーテンを引いたらすでに夜は明けていた。三時、アラスカのアンカレッヂに給油の為着陸、（現地時間は三十一日の午前八時）約一時間休憩して出発、五時半、第三回目の食事（中食らしい）更に第四回目の食事が日本時間の一日午前十時半に出る。（もう何が何だかわからない）結局、前夜の九時に羽田を出て、翌日正午、（現地時間一日午前四時）コペンハーゲンに着くまでの十五時間に豪華版の食事を四回食わせられた訳だから、我が胃腸もすっかりたまげてしまった。その他その間、ジュース、ビール、タバコはもちろんジョニ黒、ナポレオン等高級洋酒も飲み放題なのだから、到着後のケチンボ旅行から見ると全く宮様にでもなった様な快気分といえよう。とは言っても第四回目頃の分は大方カバンの中に詰め込んだとはさすがに地金は争えない。

三、頭の中にアレルギー

日本時間の正午を八時間もどして現地時間の午前四時に直し、ヨーロッパの北の玄関と称されるデンマークの首都、コペンハーゲンの街に立った、今まで映画やテレビなどでしか知らなかった、これがヨーロッパというものかと思うとやはり感慨新たなるものがあった。この気持ちは以後ロンドン、パリ、ローマ、ベニス、ジュネーブ等何処でも味わった妙な気持ちであったがやはりこの着陸第一歩の印象は特に強烈だった。ちょうど幼稚園の遠足さながらで、見るものすべて珍らしく、カラー、白黒とシャッターを切ることたちまち百枚近い。こんな調子では用意して来た五十本位のフィルムは数日にしてなくなるぞと心配していたが、そこはよくしたもので、慣れると選球眼も発達して、次第にストライク以外は打たぬようになって来た。第一日のこの興奮も今考えるとおかしいようだがとにかく日本から出たことのない私にはヨーロッパの空気を肌に感じただけで頭の中にアレルギーが起った一種の病気のようなものだったらしい。

四、交通公社の本でどうにか

帰ってから誰からも最初に聞かれたことは「言葉はどうでした」ということだったが、「通じました」というのも嘘になるし、「困りました」というのも又嘘になるかも知れない。私は交通公社の『六カ国語会話』という本を買って行ったが、これが仲々役立った。いざという場合は、これを開いてフリ仮名の日本語を読むか、指で示せばたいてい通じる。その他、「今日は」「有難う」「はい」「いくらですか」「もっと負けてくれ」位は暗誦しておいて、臨機応変ペラペラとやればよい。もっとも英語の通じるイギリス、フランスあたりは私のブロークン英語でもどうにか通じるし、又一行の中には英語の達者な者も居たので何とかなった。その上、人間と人間というものは、よくしたもので、たとえ言葉は通じなくても真心で接すると意外と意志は疏通するから妙である。

私はスイスのベリンツオーナで民家を訪ねこの『六カ国語会話』のイタリヤ語で、近所の子供らやおかみさんらを集めて、三時間も愉快に遊んで来ることができた。

しかし、だからといって英語、ドイツ語を知らなくても大丈夫というような大それたことをいうつもりはもちろんない。ペラペラ英語を駆使する人をどれほど羨ましく思ったか知れない。

尚パリの化粧品店や土産物屋、ベルンの時計屋などでは日本人のセールスマンや日本語の堪能な店員をおいている店もあるので何の苦労もない。但しこういう店は他より多少高いそうだ。又面白いのは、ローマの街頭商人やハンブルグの夜の客引男共はそれこそ、日本語が得意で、ご婦人方は顔を赤くするような卑猥な術語を交えながら誘いの手を伸ばして来るのには驚ろかされた。

五、唯々感銘仕り候

体育事情視察員が名所見物とはいささか不見識のそしりはまぬかれないが、まあ正直のところ、上は大臣から下は我々に至るまで、欧米〇〇視察、〇〇会議出席と表向きの名前は立派でも観光（と言っては語弊があるので名所旧跡視察又は調査）を兼ねていることは旅行通念かと思うのでお許し願いたい。

西洋史も西洋地理も忘れ果てた私だが、ロンドン、パリ、ローマ、ライレンツエ、アルプス（ユングフラウ）、ライン下り等々で見せられた建築物、彫刻、絵画、風景の豪壮さ、古さ、素晴らしさ、ヨーロッパ文明の偉大さの前に唯々頭の下る思いをするのみであった今までは、美術全集などでしか知らなかった有名な建築（たとえばベルサイユ宮殿）彫刻（たとえばミケランジエロのモーゼの像）絵画（たとえばレオナルド・ダ・ヴインチの最後の晩さん）風景（たとえばローレライ）何れも、肌で感ずるというか、生きたもの、実物をこの眼で見るという感銘は終生忘れ得ないほどの深いものがあった。大きな声では申せないが、これが今回の旅行の最大収獲と言っても過言ではない。

六、飲んだり食ったり

向うで出される食事は総て西洋料理だ。（あたりまえの話）しかしこれもピンからキリまであって私共のものは前述の飛行機の中以外はすべてキリの方で、朝は決ってコーヒー又は紅茶にパン、たまにハムエッグのおまけ、昼、夕は国によっても違うが大体スープに大きな肉、野菜、主としてジャガイモ、豆、（グリンピース）それにパン程度のものだが、不思議なことはこの旅行中一度もソースというものにお目にかからなかったことだ。我々はおよそ洋食と名のつくものはソースをかけるものと思っていたので認識を改めさせられた。実は出発前、味噌汁や沢庵漬、が恋しくなるものと覚悟していたが、気候風土になれたせいか少しもその欲求はなかった。しかし帰って来て一番うまいと思ったのは、やはり米の飯に味噌汁と漬物、魚、お茶であった。魚も旅行中遂に三寸くらいのイワシみたいなのを一尾つけられただけだった

西ヨーロッパへ行ったら絶対に水を飲むなと言われていたが、スイス、ローマ以外は水道の水も飲まぬことになっているようだ。水が欲しい時は、ミネラルウオーターと称する水を買って飲まねばならない。一合位の瓶詰が国によっても違うが大体百円から百五十円位、だから結局むしろそれより安いビール、ワイン、コカコーラを飲むことになる。スイスの水はさすがにアルプスの雪どけ水のせいかうまかった。それもロハであるからたまらない。

ビールは日本のいわゆる普通のビール瓶は全くなかった。全部小瓶専門である。一本百五十円か二百円である。我々は持ち金は制限されているので如何に呑み助でも晩酌二本という者は殆んどいなかったのはいじらしい限り。

ミュンヘンは本場と聞いていたので一杯味わってみたが、大したことはなく日本のビールが世界第一の味と思えた。

果物はフランス、イタリア、等割合豊富で種類も柑橘類、桃、リンゴ、洋梨等が多いが、日本のように形や色、味、のいいのは殆んどなく、値段も、三～五倍、日本のデリシャス、水蜜など一度連中におがませてやりたい位だった。

パリでは日本人経営の日本料理食堂「とうきょう」という店があった。献立てを一寸紹介すると、（メニューにはフランで表示）お吸物一五〇円、みそ汁一二五円、さしみ四〇〇円、すき焼二人前一三〇〇円、にぎり飯、のり茶漬、三二〇円、湯豆腐、冷奴二四〇円、日本酒一合（白鷹一級）六〇〇円とまあざっとこんなもので、それでもパリに住む日本人はここで郷愁にふけるせいか結構日本娘五、六人を置いて繁昌しているらしい

七、華道師匠、国鉄総裁に参考のため

各国を通じて感心したことが二つある。一つは花を愛するというかデンマーク、オランダ、ベルギーが特に多かったがその他各国で普通に見られた風景として、アパートといわず、民家といわず、役所といわず、窓々に一ぱいの花（鉢植、ゼラニューム最も多し）を並べて飾っている風景に多く接したことである。日本では華道何千流とか言って切花をカッコ良く生けて、それを家の奥深く床の間に飾って、奥床しいとか風流とかと楽しむのだが、連中のは時には橋の欄干や電柱にまで植木鉢を並べ我も人も楽しむという精神をみせつけられ、どちらが本当の風流といえるだろうかと疑問を持たされた。

華道の海外進出も結構だが、国体の線香花火式花一ぱいでなく、これこそ大いに学ばねばならんと感じたことである。

それから汽車であるが、映画「終着駅」で有名なローマのテルミナ駅をはじめ、私の見た限りではヨーロッパの殆んどの駅が改札口というものがない。プラットホームへは入場券なしで、誰でも入れるし、無札でも気軽に乗り込めるのだ。乗客は自分の行く先まで切符を買い、乗車中に車掌にハサミを入れてもらうだけだ。つまり、長岡までの切符で上野まで行けるというあんばい式だ。どうも話がうますぎるので、案内者に聞いたら、「誰もインチキをやる者はいない、人間は悪いことをしないものだとの前提に立って運営されている」との返事。真偽の程はわからないが、いい話だ。二〇円の入場券を買わねば新婚旅行の見送りも出来ない我が国鉄よりは人間尊重の実が上っているようだ

八、日本に似ているローマ

乞食の多いこと、街のきたないことでローマは日本に似ていると聞いていたが、なる程、老若男女の乞食につけまわされて、困った。日本の比ではない。

同行の東教大附属高校教諭J氏は夜一人でテルミナ駅の銀行へ両替に出かけた。カナダの卓球選手で東京オリンピックに出た電気技師という旅の青年に話かけられ、すっかり意気投合し、バーへ連れられてビール、四、五本飲んだ。帰り際に百ドルの請求書をつきつけられ、払わされ、タクシーでホテルの近くまで送られて青くなって帰って来た。その後二晩がかりでホテルの主人共々そのバーを探したが遂にわからずじまいで終った。両替で金を見られ、なつかしい日本の旅の話などされて、すっかり信用し、卓球がオリンピック種目にない嘘を見ぬけずこのあり金ほとんどをとられる災厄にあう

ヨーロッパ人の性善説も疑わしい。どうもローマは日本に似ているようだ。

九、住みよい日本

「何のために高い金を使ってヨーロッパ旅行をするのか」と私と同行した七三才のおばあさん（元高校の英語教師）は息子に聞かれ「日本を見直すためだ」と答えたら、「それならよろしい」と言われて来たと話してくれたが、「燈台もと暗し」のたとえのとおり、真の日本を見るには、一度外国の土を踏むことが手っ取り早いし、良さも悪さも比較でき、しみじみと見直せるようだ。

四季の移り変りの程よい日本、水道をひねればおいしい水がふんだんに飲める日本、六時以後でも日曜でもみせ屋の開いている日本街中どこでも冷い牛乳や飲み物を売っている日本、果物がおいしく安い日本、トイレへ入ってもチップなしでロハで大小便の出来る日本、旅館へつけばモナカを出し丹前を着せてくれ、ゆっくり風呂に入れる日本、住むにはやっぱり日本が一番いい国だ。これで住宅問題、交通地獄が解消し、給料が倍増し、黒い霧が晴れれば日本は天国である。

（附記）

1未筆になり恐縮ですが、この旅行に対し母校より、又同窓有志各位より過分のご餞別を頂戴しました。厚く御礼申し上げます

2旅行目的の体育事情については専門にわたりますのでワザと省略させていただきました。

3近頃欧州旅行などは高校生の修学旅行にまでなって（パリで大阪の私立高校生の団体に逢った）だれでも簡単に行ける時、発表するほどのことでもないのですが、沢山巌先輩の強制もだしがたく、思いつくまま迷文を綴ってみました。あしからず。

（四二、一、九、記）

ローマの「トレビーの泉」にたたずむ筆者

激動期の教訓

本校職員　岩野祐吉

本校七十五年の歴史の中で、昭和十五・六年の頃が一つの危機ではなかったかと思う。今ならストーブを囲んで、ベトナム戦争の冷い話に花が咲き、次第にX談・Y談・Z談、はては大笑いでいつとはなく凋んでしまい、おのが机にせっせと答案の採点、こんなことで、何時かは何かが勃発しないではおかないぞと却って不安を感ずるほどの平和な明け暮れ。あの頃の教務室には笑いがなかった。いつ自分が適当な口実のもとに去り難い本校を追い出されるのか、頸を洗って待っていろと言わぬばかりの地盤に笑いどころではなかった。僅か二年の間に、永年勤続された先生の丁度半分、二十二・三名が転出を余儀なくされ、離任式――あの頃は告別式といった――が相ついで行なわれた一事から、事態の容易でなかったことが想像していただけよう。

一、散りゆく頑爺校長

頑固で令名を馳せていられた梅田校長先生、ほんとに懐かしさがこみあげてくる思いの校長先生、その風貌がガンジーそっくりなので、この尊名を奉られていた。「頑爺」を懸けてのニックネームに本人もご満悦。全国を代表して天皇陛下のご気嫌奉伺に参内されるだけあって、県庁の教学課長を電話に呼び出して、用件の連絡をされた。

第一学期も終って、ランチで中食の席、数学のY先生が軍の教官として転出されることになり、校長の紹介があったが、次第に激昂した校長、

おれは〇〇出の教員はとらぬというのに、君の校長がぜひというので、やむなく採用した。しかるに二年で転勤とは何事だ。やっと一人前に授業ができるようになったというものだ。梅田が非常におこっていると、母校の校長に知らせよ。

と鋭い語気。当のY先生、ポロポロ涙を流される。切角のランチではあったが少しも味はなかった。

こんなこともあった。五年のA先生主任のクラスの生徒が、陸軍士官学校に入学することになり、シャモ先生の軍事教練をボイコットして、駅頭に全員馳せ参じた。シャモ先生、出席簿をふりふりグランドに出るが一兵も姿を見せない。謹直な斎藤先生のことだからその足で梅田先生に直訴に及ばれた。絶対信頼していた先生の筋の通った話をきかれ、翌日、全員講堂に集合、壇上に立った梅田先生いきなり、

お前たちはまだ子供である。どんなに目的がよくても、駅頭の送別が永遠の離別になるから同級生の情として忍びないものがあったにしても、大切な授業を無断でボイコットするとはけしからん、謹慎を命ずる！

ということになった。職員会議を開くでもない、自分で信じたことは、少しも躊躇することなく、ぶちまけられた。それでも誰も不満を言わない。「鶴の一声」とは梅田先生のためにわざわざ用意された感があった。

その名物校長も昭和十五年の第一学期で退任となった。教頭の紹介もなく、終業式の訓辞をされるのかと思っていたら、

おれは本日をもって、本校の校長をやめる、と言われた。あとは何を語られたか記憶にない。後になって、職員に辞任を決意した理由をのべられた。

自分は若い諸君の研究物を読んでも理解できなくなった。この間もN先生から、哲学雑誌に発表された「近松における死の問題」をいただいたが、どうしても解せない。古くなったようだ。

もう一つ、適材をもって職員組織が不可能になった。梅田先生は絶対新卒は採用されず、県内外でこれと眼鏡にかなう人材をピックアップされた。卒業生が自慢話に「おれたちはいい先生に指導していただけて幸だった」というだけあって、しっかりした先生が、国語・数学・理科・英語・教練に至るまでキラ星のごとくであったことは事実だ。それができなくなったというのは、当時、他県に転出すると「拾円」（今なら一万円～二万円）昇給した。若い先生は、次から次へと校長室へおしかけて許可を懇請―強要だったのだ―その理由となると黙秘権の行使、ソッポをむいた先生方が校長室の戸を開けて出てこられる音まで耳底にあって再現できる。

この二つが主要な理由であったが、他にもあった。「一組制度」に対して、ようやく世間から非難ののろしがあがったことだ。特に県官の子弟でここに入れないものがいたことが、拍車をかけたようだ。

もう一つは、梅田先生は筋違いだとして、陸軍省の命令に服従されなかったことも挙げられよう。中学校は独自の使命がある。授業をつぶして射撃場の整備とは、まことにもってけしからん。将来に伸びるものは、今縮まっていなくてはならぬ。中学生に軍人の真似はいらぬ。軍事教練の査閲に先生方を生徒の先頭に立たせるとは、おれは文部省の命には従うが、陸軍省の指示には従いたくない。ヨウカン色のつばの大きい帽子、ほころびている袴、下駄ばき、射的場の松の木の下で、誰をもえらばず語った。

頑爺翁の英知ではどうにもならぬところに、大東亜戦は進捗し、勝つための新体制旋風は容赦なく吹きまくっていたのだ。飛ばされる先に自分から散って行かれたのが梅田校長だった。

二、震度8の浅水地震

昭和十五年八月中旬、次第の校長浅水先生が新潟駅のホームに巨体をゆるがせながら着任された。ルーズベルトそっくりだと直観したが、案の定、あだなはルーズベルトに決定。

九月一日に就任式が行なわれた国旗掲揚塔の下に、学年別に整列した。紹介が終って、校長の査悦?が行なわれた。五年生のあたりから、罵声・怒声につづいて、なぐられる音がきこえた。洋服の下から、ワイシャツがのぞいていたためだった。生徒にあるまじき態度だというのである。今なら全員ピンタの乱舞というところ。

この一事で、浅水校長着任の理由も、今後の施政方針も、底まで見えすいていた。第二師団管下唯一つ残された陸軍省非協力校、新体制のみ旗を心よしとしない職員の大掃討セン滅作戦の敢行。今考えてみても粛清が必要であったと思うふしもある。耳が遠くなってすぐそばにいても大声で話される先生、数学の先生でありながら成績一覧表の合計を間違える先生それが運悪く校長先生の息子さんの主任ときている。一週間のうち二日は休む先生。たしかに沈滞の一面はあったようだ。

ボート部が新入生歓迎を兼ねて信濃川を溯って白根まで遠漕、これがならわしになっていた。連中白根の橋の下にボートを繋留まではよかったが、橋の上を通る美人にタワムレたらしい。校長を電話口に直接よび出し、不心得の忠告

〇〇君（ボート部長のN先生）世の中には申訳ありませんでしたで済むことと、済まないことがあることを知っているだろうね。

と職員会議の席上、平あやまりして陳弁されるN先生にとどめの一句。N先生はしばらくたって、東京の軍需工場の青年学校に行かれた。そして、早くこちらへ来るべきだった。一日七時間の授業でも耐え忍ばなければならないと覚悟はしていたのに、それがなんと一週間の授業数だった。云々……

の長文を寄せられた。ほっとされたのも束の間、何が原因だったか不帰の客となられた。

そのご長男が一組の中の首席、東大国文科出身で、今昔物語の権威。七十周年史に一文寄せられたが、

わが父を殺した母校に一銭の寄附でもしたくない。

と、今だにしこりを残していられる。こんなにまで、いやかたくなと思われるまでと考える方が、あの地震の恐ろしさを体験しない者の、身勝手な失言なのかも知れない。

このようにして、オット教頭先生から、赤チョン先生、この先生はそれこそなくなられるまで、新中、新高の先生に仰ぎたい実力のある先生だったが、この先生まではるばる山口に婿入り。もうすっかり白髪になられ、昔を忘れたかのようにもの静かでいられる。

それで、先に述べたように、告別式が相ついだのだ。

永年ご厄介になった学校を去りたくはないが、一身上の都合でやむなく……

とどの先生も述べられる。生徒会長の上村君は、惜別の辞を呈するそして駅頭に送った。興奮し、激昂した連中。雪崩の如く、わが家に殺到。

先生どういんだね!!〇〇先生は泣いて手を振っていたんだでね送らないところを見ると、先生もあちら方なんだろ、そうだ、そうだ!!

玄関先に忠待に出たわが輩、ぶるぶるしながら、

子供がハシカにかかって、ねてるんだ。すっかり目がくわってしまって

と誤解をとくよう弁解したが、耳に入らばこそ。これがもとで、外に大声がすると子供達は、またあれか、とつい最近まで恐怖・戦慄した。

学校は新旧の色わけもあざやかに二分された。職員会議でも大体二つに分れていたようだ。少しでも新しい方のご気嫌を損ずる発言でもしようものなら、柔道五段のK先生のお見舞にあずからなくてはならぬ。

書きたくはない、忘れたいことだが平泉澄先生門下の日本精神主義者N先生、一撃にあって一たまりもなく潰滅。「日本帝国軍人を侮辱したな」並みいる人達はただ呆然とするばかり。その時、

職員会議席上で、何ということだ!!

と喰いつかれたのが歌川ブル先生岩木教頭が司会していられたが、そちらをフチナシ眼鏡ごしににらみつけて、ひらき直られた。流石の五段先生も、「申訳ありませんでした」と、おとなしくあやまられた。

このように、先生方がマッ二つにわれていたのであった。職員会議に、もみにもんで決定したことも、

いや、おれは柔道をやってわかるが、それくらいの元気がなくては。

と暴力を振うやつを処罰しても、一言のもとに無罪釈放。あまやかされていささかズに乗っていた。

よくも伝統ある〇〇部を侮辱した。正面の神棚にむいて、申訳ありませんでしたとわびろ!!

とある時、ものすごいシゴキにあった。前月の県下大会の決勝戦を見ていたが、審判席からも、参観者の中からも、卑怯だ!卑怯だ!!

とのヤジがとんだので、いささか心をすえかねて、翌日リアルに語って忠勤に及んだつもりが、いたく逆鱗にふれ、怒声・罵声、の雨あられの中、旗野親分に救われた

何してるんだ、お前たち。この旗野にまかせろ！

その時の張本人の二世と教室で対面の光栄に浴している。お互、若かったことのなせるわざだ。

その他、岩木教頭をカン詰にしたこともあった。春の陸上大運動会終了後、五年生は居残れということになったが、実は教頭を昔の図書館に密閉して、入口にバリケードを築き、暗くなるに及んで電燈を消し、ヤメロ、カエレ、の怒号。誰も知らなかった。小使が、この危急を救える人はシャモ先生しかないというので、現場に到着するや否や、

なってことをしるんだ。さいとうだ、さいとうええずだ、

と戸外でどなられたら、やっと拘禁の解除の緒が見えはじめたとのこと。新発田弁まるだしの斎藤栄治先生は、あの時の不穏の空気をよく話してきかされた。

斎藤先生も歌川先生も亡くなられた。梅田校長先生も晩年は不幸であったらしく、創立六十周年にぜひ来て下さいとの返信に、八十を過ぎて早く死にたいと思うが、医者は心臓が丈夫だから、まだまだと言っていると、昔日を思えば予想できぬ便をよせられた。浅水先生は在職一年の中、終りの一年は校長官舎に病臥。これが一そう対立を激化させた因だ。その浅水先生も、岩木教頭先生も若くして亡くなられてしまった。それこそ生徒からも、ダカツの如くきらわれ、離任式もなく本校を去り、青森県の校長先生になられたのだが教頭としての問題はあったにしても、てきぱきと仕事をされたし、能力もある立派な先生だった。浅水先生も岩木先生も優秀なご長男をお持ちだったが。

ここまで書いて来て、これは本校の危機であったばかりではなく大日本帝国も未曽有の危機に直面していた。その大きなあおりが、この中学校まで侵入してきていたのだと思う。誰も彼も危機意識をもって、どうしたら戦車に勝てるのか、これが最良の方法だと信じてやったに違いない。恨むどころか、傷つき破れたものもろともに一蓮托生、そんな気がする。所詮人間は自分たちで作った運命を、あたかも天の与えたもの、逃れられないものと誤解しかできない愚かな存在でしかないのだ。

すさみ切っていた北陸、いや全国の名門校新潟中学校、そんなことは一向ご存じなく、国民服を身にまとわれた磯　幸次郎先生、新潟駅頭に堵列する中、白い手袋で敬礼されつつ着任。「いや驚いたまるでバケモノ屋敷」と今でもよく口にされる。島津教頭（県教育委員長）と協力しての拾収集。めでたく創立五十周年記念式を盛大に挙行し、妖雲を一掃されたのだった。（四一・一二・二十二記）

〝誤録〟昭和十七年　青山紅衛兵

五十回　上村光司

ニイガタデザインセンター

昭和十七年、晩春、運動会の果てた夕方、廊下で鈴木先生（カニさん）に声をかけられた。「きょうは何もしないんだろうね」反射的に「はい」と答えたものの、何もとは何のことかと首をひねっているうちに「会議室へ来いや」と仲間のお呼びである。見れば元気のいいのが二、三十人、部屋いっぱいコの字型に展開しているではないか。何かとはこのことかと思う間もなく、先生に対するガイタンが始まった。

だれがどうやってお招きするのか、一人終わればまたお一人―共通していたのは、比較的新しく転任してこられた方々だった事―みんなノボセて終点がわからなくなりかけたころ「シャモさん（斎藤教官）を呼んでこい」という声。やがて駆けつけた斎藤教官の一言で騒動は終ったが、「少し酒がはいっているが失敬する」といわれたそのお顔と声がいまも耳目に残っている。

これに似たことが他にもあったかどうか。

――夏休みが終って登校したとき私はあの夜、ガイタンの対象になった教頭先生をはじめ数人の方がすでに交替していらっしゃるのを知った。

（当時の先生方以上の年齢になった今では、とんでもないことをしたとホゾをかむばかり。そのくせ、書けといわれればつい安請け合いするのだから、全くバカはなおらない。この一件の全容を私は知らない。同期生はもとより、当時の先生方も多くはご健在だから聞いて回れば真相に近付けるはずだが、やめにしている。要するに恥ずかしいのである。こわいのである。それに思い出なんてのは、酔っぱらったあとの記憶みたいに切れ切れになった方がいいだろうと思っている）

実際に騒いだ生徒はほんのひと握り。直接間接の動機もさまざまだったようで、中共の紅衛兵みたいに、糸をあやつる大親分がいたとは思われない。生徒の中には平本稔という快男児にシンニュウをかけたようなのがいたが、満州で戦死した（はず。詳細不明）からいまとなっては聞くすべもない、ただ私自身のことをいえば寂しかったのである。そして多分これが生徒の共通した気分だったようだ

私どもが四年生から五年に移るころ、多くの先生方が交替されたアダ名ばかりあげて恐縮だが、オット、ギャク、サンゾク、ヒス、センキン、ガキ、モヤシ、数えたてきれない気がする。その方々の異動の理由はわからない。勤続年数が長くなったり、伸び盛りで異動の時期に当たっていたのかも知れない。ただ子供心は、入学当初以来の先生を、学校そのものと同一視してしまうクセがあるらしいとにかく寂しかった。

寂しいといえば、私ども五十回生から制服が変った。黒地に赤線のイキ（?）なのが、カーキ色に赤線となったのである。もっとさかのぼれば、小学校の読本が「ハナ、ハト、マメ、マス」で、次の年からカラーの「サイタ、サイタ、サクラがサイタ」であった。いつも端境期に置かれているような欲求不満が潜在していたのかも知れない。昭和十五―十七年、学校教育が何を要求されていたか―いろんなことが変った。子供もお先棒をかつぎたがる反面、とまどい寂しがった。

それはともかく「国体の本義」などという本を、毛沢東語録なみに信奉するものもいたのだから、この青山紅衛兵ども始末に困る。日本の日本たるは、悠久の神代からの伝統を生かすにある。青山の青山たるは、先人の築き上げた伝統を守るにある。いまその多くの先生達を去らせるのは、伝統を破壊するものである――などと妙な三段論でアジ演説をしたりした。そのあげくの果てが一部の先生に対するガイタンだった。

事件がどう展開し、収拾されたか。この点について紅衛兵はいつの世でも無責任なものである。それにしても、暴れん坊全員、よくも退学にも停学にもならずにすませてもらったと、いまも時々首をなでる。それも先生方、父兄、先輩のご奔走のおかげだった。これは一生消えない負債である。そして何よりも、心ならずも紅衛兵どもの攻撃の的にされた先生方には何と申し上げてよいやら汗が出る。

（四分の一世紀を経ては、記憶は引きちぎれ混線するばかり。だからここに書いたことも誤りが多いと思う。ゾウのシッポの先にさわった酔いどれ盲人のタワゴトと笑い捨てていただきたい。）

オリオン印刷KK
67回　石田瑞穂
71回　石田武威

クラス会だより

久しぶりの三三会

三十八年の地震の年以来、三三会の会合はなかったので、日頃そちこちでお互い顔を合せるたびにおい幹事の尻を叩こうぜと云うことで、督促頻りなるものがあったのだが、何分超多忙の幹事連中であることと、なんか憑きものが落ちた後みたいに、一寸調子の出ないような格好のまま、漸っと四年目の三三会が、旧臘十一月二十日（日）午後五時半から、古町八、西新道の魚がしで開らかれた。さすがに出席者上々の二十名。全部で一五〇名の同勢だったのだからわれわれの年輩で、これは先ずいい出席率だろう。

特にみんなを喜ばせたのは、戦後北京大学を引き揚げて群馬大学医学部の教授をしている山添三郎君と、同じくアンガウル島から帰って中条町で医院を開業している明間俊策君が、卒業後四十何年振りに初めて顔を見せてくれたことだ。これだけでもなつかしさに酒のピッチも大いに上った。

思えば大方すでに六十の関所を目前にして、びん髪によいよ白きを加え、禿頭更に磨きを増して、孫の可愛いさやその数を得々とする莫迦ヂヂ振りを覗かせていたが酔うほどに昔のヤンチャ野郎の面影が露出して来て、すっかり愉快になった揚句に、今後は絶対に年二回の開催の実行を幹事に厳命して、八時半散会した。

正月には市内在住有志の新年会をやることになろう。

（斉藤　記）

50回生夏季定例会

旧聞に属するが、青山五十回生は四十一年夏季定例会を、八月十日夜新潟市イタリア軒で開いた。

毎年一～二回の定例会で、卒業当時の担任の先生方をお迎えしてささやかに盛大にやることにしている。この日は東京から駆けつけた者をまじえて出席者約四十人、藤沢光雄、木村晋両先生から、ご多忙の中をご光来いただくことができた。木村先生などはご旅行から帰ったその足でというトラック以上のトンボがえりまでしていただき恐縮の至りでした。

熊木幹事が敏腕を発揮して、受付けで同窓会費五百円を取り立てたのには、出席者いずれもギョッとする。出席予定者が十人近く欠けて、こんどは幹事が青くなり、緊急動議を出して会場で会費の追加徴収をしたら逆に集まりすぎたという次第。

なお東京在住組から「ことしは鍋茶屋でやらんか」と提案してきている。

あたまのテッペンだけは、先生方と区別がつかなくなったのが多い。右手前のテーブル、右から二人目が藤沢先生、その左が木村先生。

六十六回生クラス会

一月四日市内「わかすぎ」で最初の学年合同のクラス会を開いたが、準備が行届かず二十数名の参加であったが、沢山、松浪、岩野横山、内山の諸先生を囲んで楽しい思い出話に時の過ぎるのを忘れた。次回から多数の出席を望む。

（吉田六左衛門・堀口忠六）

同期会盛会　五四・五五回

木村、阿部（達）沢山、阿部（正）渡部、諸先生をお招きして恒例の一月五日午後五時半より円応寺会館で開催、出席五十一名午後九時過ぎまで歓談、旧交をあたためた。

同年会の近況　第五十一回生

あの未曽有の大災害であった「新潟地震」の年に、我々昭和十九年三月に卒業した五十一回生の間で、多かれ少なかれ被害を受け、シュンとしていた我々の志気を一つ高揚鼓舞しようと長年無音に打ち過ぎていた旧懐を温めることを兼ね、会合を持とうではないかということで、かっての柔道部の暴れん坊が音頭をとり召集をかけたところ、三十九年十一月二十八日（土）には、当時八十才を越えられた金沢（ゴリ）先生を始め、六名の懐しい先生方を迎え、約七十名の顔が揃ったのである。

中には卒業以来文字通り二十年振りに顔を合わせた者も少なくなく、頭の上と皮膚の状態を見るとどちらが恩師か、教え子か、全く判断に苦しむ者さえあらわれ、時の流れを改めて認識させられた次第であった。

一方、又、我々同僚が、各界各層で、大きく活躍しており、お互いに玲瓏の天を仰いだ学友として意志の疎通をはかるならば、社会人として一層プラスになる面も多いことをおもんばかり、恩師並びに出席者全員の御賛同を得て、毎年十一月最終土曜日を我々五十一回青山健児の会合の日と決めた訳である。

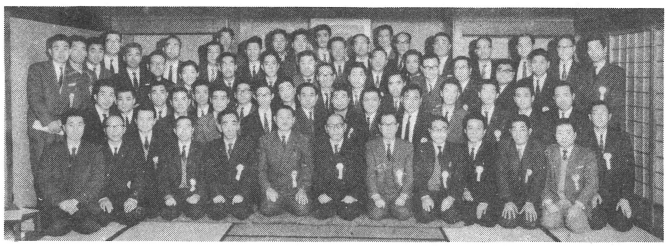
以後例年会場も同じ新潟市の「金寿」において会合を持っているが年々その意義も深まり、本年は第三回目の会合を去る十一月二十六日（土）に七十名余の出席を得て、盛会裡に同窓会の発展を祈念しながら、無事散会した。

写真にも懐しい顔振れが見られると思うが、当日御出席の恩師は漢文の菅原憲雄先生を始め、木村晋、武田慎三郎、飯塚正雄、宮部与一の各先生と、母校に現役として教鞭をとっておられる沢山巌、岩野祐吉の両先生の計七名であった。

御常連の藤田佐市先生外のお顔が欠けたのが一同の心残りであった。

年令（よわい）四十才を数える我々が、青山の学舎（まなびや）で雄図にあつき血を躍らせた、かっての若き時代を振り返りながら卒業生の約三分の一に当る多勢の同僚が、毎年、毎年、意義ある集いをもっている姿を同窓会の諸兄にご報告申し上げ、一層青山同窓会が発展することをこい希いつつ近況報告にかえることとする。

（佐野　記）



六十三回生クラス会

昨年夏に引続いて一月三日市内保盛軒でクラス会を開いた。正月であったので東京の連中の参加もあり、情報交換をし、東京在住者の名簿も相墨君の努力で完成したので、地元のものと合せてクラスの連中の消息がはっきりしてきたので、これからの六三回の組織が強固になり、クラス会も盛んになってゆくことであろう。地元では毎年一月三日にクラス会を開くことに決めた。

（赤羽　記）

寄宿生活の思い出

三十五回　武田慎三郎

今から四十年前もの話。校舎も寄宿舎も竣工二年目（大正十二年の入学）だから新しく広く舎生も大勢いて賑やかなものであった。

一カ月二回は万代橋（今の三倍も長い木の橋を思い出す）下の船付場から安進丸に乗って小須戸までさく航して帰省した。

舎生総員六十名位で四、五人ずつ一部屋で生活した。規律は軍隊調。学資金二十五円は毎月親から舎監へ納入。十銭の小遣銭まで担任舎監のところへもらいにいったものだ。当時の諸経費は「入学志願者並ニ親権者ノ心得ヘキ要項」の一項目に次のように記してある

一、寄宿舎生徒費用ハ授業料食費小遣等ヲ併セ一ケ月二十五円内外トス、尚書籍費、被服費、遊方会費等年額約左ノ諸費ヲ要ス。

教科書拾弐円、ノート類五円、筆墨紙類五円、博物実験用解剖器機弐円五拾銭、遊方会費四円五拾銭、試験用紙代七拾銭、夏洋服六円、冬洋服拾壱円、マント又は外套拾五円乃至拾八円、ゲートル壱円八拾銭、帽子参円五拾銭、靴七円、柔道衣六円五拾銭、竹刀八拾銭、柔剣用具……等購買部に於テ販売ス。

なお授業料参円、舎費壱円、食費平均拾四円五拾六銭その他小遣等の出納決算の詳細は舎監から毎月親元へ報告されたものである。

寄宿舎は今のプールとテニスコートのある処であったから校舎続きで都合がよく、中食は食堂で食べ、始業ベルが鳴るまで部屋にごろごろいた。今の校長官舎が舎監長官舎で舎監長鈴木モンド教頭、つぎが渋谷カバ教頭が住んでいられた。（敬称省略、俗称で恐縮ながら慕わしさにまかせて）舎監斎藤シャモ、高岡芋虫、高橋チョウマツ、大野タコ、市塚バファロ、長内オイワ、大内阪妻、加納聖人原田三二、徳本正俊、炊事夫笹川桃太郎夫婦。

よく遊びよく勉強したがグランド続きの裏の砂山で日本海を眺め夕陽の沈む光景を眺めている時が一番よかった。ぐみ林、ひばり、海水浴、浜辺の飴屋の鐘の音など当時の様子が懐かしく思い出される。舎会（学芸会）は舎監の歩き方を真似る者、口真似をする者などで賑やかなものであった。春秋の一泊旅行も楽しみの一つであった。

事件はいつも夜と決っていた。上級生は夜半になると元気付いて下級生をたたき起す。

月のない真夜中に試胆会が始まり、海まで水を汲みにやられたり競馬場まで名札を置きに行かせられたり、途中にしかけがあったりで大変だった。夜明け近くになっても一人が帰らないというので大騒ぎになったことがある。念仏寺の桃事件、小使室の鶏事件、学校町の看板かき集め事件等々。忘れられないのは三年生時代のある夜中、オイワ、カバの身代りとなってぬれる雨もり事件というのが起った。夜半、舎監室の上の私どもの居室の畳をはいで誰れやらがバケツの水をこぼして舎監宿直室に寝ていられるオイワ殿にぶっかけてしまった。翌早朝に私ども同室五名が呼び付けられてカバ舎監長のお説教をながながと聞かされ、シビレを切らして五名とも歩けずに四ん這いになって階段を登ったことがある。ぬれぎぬもこうなると犯人が恨めしかったが、この時のいたずら者はシャモ殿のお宅へおあずけの身となった。関係した上級生は今もって確かでないが毎年一回渋柿会（寄宿生活を共にした者）の集りではこうした昔話に花を咲かせて呵々大笑して時を忘れる有様。

人力車時代であったから外出はどこまでも歩きだ。映画観覧は不許可、白山祭は許可制で午後十時までに飴湯、小豆湯を飲んで芝田サーカスを見て帰るのが楽しかった。

曜日を決めて菓子屋が出張販売し二十銭だけ買うことができた。待ち切れなくて中間には阿弥陀くじをやって、カルセンや関ダンを食べ合ったものである。下級生にとっては監視付一銭也の買物強制にはほとほと弱ったものである。行先は女学校前の団子屋か焼芋屋で、上級生は首尾を待つ喜びにひたっていた。

これも三年生の時、剣道初段を取って大喜びであったが学業成績がガクンと下って田舎の親父が渋谷舎監長に呼び出された。二人の前で剣道をやめますと誓わされたしかし卒業するまでやめなかったことが縁となって母校の教師になった時、それも終戦後の話になるが高橋一銭師範病死後私が剣道部長になった。それにマッカーサー司令部の学校剣道廃止の厳命で剣道部解散部長の苦しみも味わった今、市内中学校体育連盟剣道部長をやっているが、これも中学時代高橋一銭師範、上村秀師範の薫陶よろしきを得た賜物であったと思う。

寄宿舎は昭和八年頃からぼつぼつ取りこわされ、舎監長官舎は校長官舎となり梅田ガンジー校長が住居した。一部は盲学校に移築され、その跡にはプールとテニスコートができ上った。私が母校の教師になれたのは寄宿生活五年間の茶目振りが預って力があったのかも知れない。昭和三十年三月まで通算二十三年六カ月の永年勤続者になってしまった。この間、母校に入学して来る恩師や同級生の息子息女も多数教える光栄をになった。

昭和二十七年創立第六十周年記念式典祝賀を盛大に挙行した二年後の二十九年四月四日早暁の大火で、この懐しい思い出も深い校舎は全焼してしまった。

青陵健児の像建設進む

昭和四十一年春の卒業生が、卒業記念として例年のように金十万円を寄贈して校門を去った。そして青陵健児の心意気を表現するものを作るのに使用して欲しいとの希望を残して行った。彼等のイメージに具象的なものはなかったのであるが、後輩が校門を入った時に吾こそ青陵健児なりという意識を甦らせるような何かを目につく所に作りたいという願であった。

何故彼等がこのような希望を託して卒業していったのか、青陵七十年の歴史の流れを止めるような青陵校名問題の中心となって活躍したのが彼等であった。そして問題が希望するような解決をする見通しもなく挫折感をいだいて校門に別れを告げた彼等の姿が気毒でならない。この時点における彼等がこのような希望を残して去ったことは無理からぬことゝ思う。

しかし寄金を託された学校側は十万円で何が作れようか全く困却の態であった。

彼等の心情にいたく同情された鍵富会長を通じ、三十六回生の彫刻家、渡辺徹氏の耳にこの話が入り、渡辺氏は後輩の心に非常な感激をされて是非自分の畢生の作品を作って母校に寄贈して彼等の気持に応えてやろうという厚情を寄せて来られたのである。この御厚情に甘えて、昨年八月青陵健児の像建設委員会を組織し、この事業を進めることになった。建設予定地も正門を入った右手（前に奉安殿のあった所）に定められた。

渡辺氏の寄贈をお受けするにしても、材料費、台座費、整地費その他で一五〇万円位の資金が必要なのではないかと予想されているのである。同窓会有志の方々及び各方面のご協力を得て、この事業を是非とも達成したいというのが青陵の歴史と共に歩んできた者総ての念願でなかったかと思うのである。

渡辺氏はこの春の卒業式までにとも云っておられたが、静かな落着きと理性をこめた等身大の青陵健児の像が建設される日の一日も早からんことを祈念するものである。

（沢山　記）

泉屋スポーツ
20回　村山清吉
69回　村山郁夫
71回　村山克夫

卒業回数	氏名	職業・勤務先	住所

[redacted]

会員の移動

（昭和41年7月1日以降事務局に連絡のあったもの。空欄はもとのまま。）

卒業回数	氏名	職業・勤務先	住所

[redacted]

卒業回数	氏名	職業・勤務先	住所	卒業回数	氏名	職業・勤務先	住所
[redacted]							

物故会員

謹んでお悔み申上げます

卒業回数	氏名	死亡年月日	卒業回数	氏名	死亡年月日
7	長谷川轍	41.12.24	21	金子義晁	41.11.27
11	出塚助衛	41.10.11	26	石山市松	41. 7.20
12	長谷川寛	41.11.23	28	渡辺万寿太郎	41. 8.15
20	長谷川龍雄	41.10.11	43	石黒禎郎	39.11.25
20	畑新吉	42. 1. 5	44	畦上照	41.12. 5
21	坂口献吉	41. 8.13	50	小野誠一	40.

荒川金属
34回 荒川貢

田中ホテル
38回 田中松一

関屋自動車学校
45回 綿井兵衛

江口電業社
61回 江口良助

赤羽呉服店
63回 赤羽良樹

音楽バー バッカス
60回 田中亀二
西堀前通七 TEL (23) 1564